



TITLE:

基督教文明の發展概論(四)

AUTHOR(S):

財部, 靜治

CITATION:

財部, 靜治. 基督教文明の發展概論(四). 經濟論叢 1922, 15(6): 846-859

ISSUE DATE:

1922-12-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127973>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第五十卷 第六號

大正十一年十二月一日發行

論叢

相續税に於ける特殊累進に就きて

法學博士 神戸 正雄

勞農露國の農業

法學博士 河田 嗣郎

マルクス氏の集産主義の實行難を論ず

法學博士 田島 錦治

基督教文明の發展概論

法學博士 財部 靜治

經濟道と經濟術

法學士 作田 莊一

資料

中央市場論并に食料品配給費研究

法學博士 戸田 海市

說苑

リストと歴史派經濟學

法學士 山口 正太郎

我國の都市及地方に於ける婚姻の統計的觀察

經濟學士 岡崎 文規

雜錄

無責任なる翻譯の一例

法學博士 河上 肇

原田學士譯ボーリユー經濟學原論

經濟學士 小川 福太郎

價格指數に就て

法學士 沙見 三郎

附錄
本誌第十五卷總目錄

基督教文明の發展概論 (四)

財 部 靜 治

一〇

社會發展の見地よりせんか、宗教改革劇に於ける次の幕は、大に興味あり、單純に法皇帝國、よりの國民的一分離と、考へられたる宗教改革は、社會の構成を少しも變更せしめざりき、即ち改革されたる北歐の諸國に於ても、君主は尙神權によりて支配し、その臣民の財産をも、その良心をも統制したり、然るに英蘭に於ける諸事件の成行は、君主制に對して戰を挑むの、一氣運を促したり、詳言すればスチュアート王朝(一六〇三—一七一四年)の諸君主は、名義上新教徒たりしと雖も、かの西班牙に次いで、加特力教界の主力となれる、佛國君主と親戚關係ありしより、その同情及親族關係よりせば、寧ろ加特力教的たりき、即ち舊秩序の流儀に倣ひ、自己の意志に任せ、統治するの一神權を主張しつゝ、事實上は佛蘭西への屬邦たるの趣あるが如く、英蘭を率ゐつゝありしは、避け難き所なりき、されどそは英蘭の新精神よりせば、忍び兼ねる時況たりき、かくて之に次いで議會と國王との間に、最終主權問題を論點とし、一鬭争は惹起されたり、是より以前議會優越説を助くべき、幾多の先例は存したり、そは古く遡りて錯遜の部族生活時代の、

選定王に至る迄も之を搜し得たり、かくて民衆の要求は過去の事例に照しても、之に悖れりとするべきことなかりき、寧ろ基督教そのものが惹起されし、その原始的根源に遡りて根さるるべきものありき、從ひて幾多の變遷及多くの論旨混淆を経たる後、議會の論旨は最後に勝利を占めたり、その結果は幾分か無比なる史的一產物としての、大規模なる立憲國たりき、而してそれは當然の一行により、民主制の國家を目指して、進めりとすべきものありき、國土の管理權及收入權に關する神祕的允可の主張は破毀せられ、少くとも理論上に於ては、民衆の意志之に代ることゝなれり、資産ある貴族の諸世襲權も、含意的には同一標準の下におかれたり、されど事實としては、財産に適用されたる宗教的允可を以て、警察權より名義上引離されたるものとし、かくてそれは重大の挑戦を蒙らずして維持されたり、要するに同變革は、一膨脹時代の典型的產物たり、その直接結果は弱くして又頑固なる、一王朝の排斥に外ならざりき、そが一新政治時代の發端として、歴史に永く傳はるべきかは、今後尙民主制が、何物を齎すべきかにより決せられん。

一一

右の政治的變革を貫くに、預りて力ありしものは、羅馬加特力教に極度の反抗を加へしと共に、一政黨として勢力を收むることゝなりし、清教徒 Puritans の一派なり、教儀上に於ては嚴正なる

カルウイン主義を奉じたり、かくカルウイン派の神學は、重大の危機に處し、特殊の地位を占めたるがために、序ながら之を擧ぐるの値あり、素より史的一因子として之を取扱ふに當りては、思想の同様なる他の流れと、區別して之を考ふるの必要なし、そは事實上右の諸根蒂動搖時代に際會し、普通に感ぜられし人生觀を、稍極端に説き出せるものに外ならず、そが感憤の一態度を示すべき、念入りの表象主義シムベリズムたりしは、神話と共通なり、されど社會の諸事實につきては、來らんとする災禍及贖罪に關する、基督の漠然たる直覺以上に、之を察取すること、充分に明快なるを得ず、從ひて一新社會學說を試むるに至らざりき、尤も同派の活躍を生むの核心たりしは、呑込めざる耶蘇傳及その教による、發憤的動力に存したり、されど注意を注ぎたる中心は、天佑に非ずして、血に塗れたる十字架にあり、凄味ある一護符として、之によらば罪ある者も、罪なき者の苦痛により、幸福を發見し得べしとせられしものは然り、カルウイン主義はこの特色上、史的社會秩序の鮮明なる一相を、符徴化するの神學的風習を宣揚し、此點に於て古代に於ける、供物の儀式を繼承せり。

カルウイン主義に於て割合に特色ありしは、その神に關する概念、及人間に對する神の處置觀にあり、この概念を之が科學的對等物に、書き替へること、せんか、晩近科學との間著しき一關係を示すことゝなるべく、現に又 Darwinism は時として、生物學的カルウイン主義と呼ばれた

り、カルウインの神學によれば、人類は一の專擅なる神により、之を永遠に困めて、己れの快感を充たさんとするの主旨に基づき、創造されたるは明かなりと觀す、されど又極めて少數なる拔擢者 *elect* を、救ふも亦その造物者の目的なり、そは是等の人々に功蹟あるがために、特に然るに非ず、かく特に優遇されたる階級を作るは、その意に協へばなりとせり、ダーウイン學派の自然淘汰は、同様なる仕方により、偶然變異の作用、自然淘汰の盲目なる作用により、少數品種を滅落より引抜くとなす、唯之にありては不運なる多數者のため、その苛責の火が終には燃え盡され、かくて後には死の平和ありとの希望を、緊がしむるの餘地ある點に於て、幾分か人道的たるの差あり、兎に角右の表象主義も生物學理も共に、現代の人道的精神に對しては、如何に逆らへりとするべきに拘はらず、人生無情なるの事實は、依然として存在す。

右の嚴格なる哲學は、實に清教徒が國土の特權を、破碎するの事業に耐ゆるの一精力を、養ひ來れる所たり、そは未來に一層良好なる秩序あることの、鼓舞的直覺を感じたるも、目前には萬民の社會的墮落てふ、怖ろしき事實を目撃すること、強ひられたる強き心血の發憤的反動たりき、前途に光明を眺むとの一念ありしより、彼等は和蘭及佛蘭西に於て、彼等に加へられし言語道斷の苛責をも、英蘭にての同様に忍び難き鬭爭の苦痛をも、耐へ忍ぶことを得たり、特權ある諸階級と、戦ふの事蹟に相應して、彼等は民主制に對する、特殊の一性向を示し、そは又その

教會組織に現はれたり、されどその民主制には、民主制の面影あり乍ら、民主制の論理に基づきて起れりとすべきよりも、寧ろ間接にその境遇より來れる所たり、カルウイン主義の論理によれば、その割合に有幅なる子孫中、一部の徒を寧ろ穩かに安んぜしむべきこととなる、かくて夫等の子孫は優越せる有福の家より、産業上の地獄を見下し、正系の流儀により、天國の快樂以上に鮮明なる一餘慶を、その眼界に發見し得べしとせられたり、素より宗教改革の諸教派中福音の滋味及光明を發見し得たるものは稀なり、事實上他の何人よりも餘計に、この精神を感じ又之を表明せるは、文物復興による至醇の子、Shakespeareに存したり。

一一一

議會政治の確立は、英蘭を驅りて、佛蘭西との幾多鬭爭に當らしめたり、その鬭爭は避け難きものありき、蓋し二國民は新世界及東洋に於て、商權を争へる敵手たりしのみならず、その基本となせる政治學説は、敵對視さるべきものありしを以てなり、假りに佛國勝利を占めんか、英蘭の有力なる商人及地主階級により、多くの富を投下されたる、英國立憲制度は覆へられん、かゝる將來の一見込が、英人に力説さるゝに至りしは、理論的考量によるよりも、寧ろ James II. の子孫を擁立し、第十八世紀の初半中叛旗を蹴すに至りし、Jacobite 黨の密謀による所多かりき、之

に反し一立憲國たる英蘭勝利を占めんか、その佛國中産階級中の不平なる革命的分子に、一刺戟として影響すべきは避け難き所たりき、從ひて二國の何れにありても、その指導者は事實上餘儀なく、相手國の敗北を求めんとせり、二國は何れもその勢力の平準を保持し、かくて世界の主要中心たるの要ありき、而してその鬭争はその渦中に、歐洲諸國の大多數を引込みたること、輓近戦争に於けると異ならざりき、その結果終に米國革命の數年以前に、英蘭は歐洲にては有力の地位に米及印度にては最高の地位に立てり、かくて英は佛蘭西の國內にては、その貴族制の信用を害せしめ、一面その海外に於ける殖民的放資的企圖への、吐け口を遮るることにより、不知不識佛國を驅り、大革命の水際に近寄らしめたり。

率先して輓近立憲國を、確立し發達せしめたるの功績を、英國に歸するに當り、道德上又は政治上同國に、何物か特殊の優秀備はれるに、よるとするは當らざらん、寧ろ右の結果は、その史的過程に固有なる、創業的諸社會力のために達成されたる所たり、而してそは同國の地理的地位の結果として、又錯遜開化、基督教開化及希臘拉丁開化の、合成的影響として、人性の秘奥より伸び出でたり、素より同國民は發明の才に富めるより、その富を増し、生存競争の劇烈を緩和したりとは説くを得ん、されどその以上に、同國を殖民的放資的帝國と宣揚し、原理上古代の帝國と、著しく相違せる所ありとするも、確説たらざらん、唯同國民は執拗、公平競技の精神、常識

といふが如き、幾多の褒むべき性質を有するも、別に又之に混するに、欺瞞、偽善及利益壟斷といふが如き諸元素を以てす、要するに英國は、自國の獨立膨脹を期して、努力せる間に事實上附隨的ながら、輒近世界に對し、思想の自由及代議的諸施設を、迎ふるの傾向を授けたり。

世界的勢力への競争上、佛國に對する英國の勝利に次いで、帝政的一反動は自然に起り、George III. (一七六〇—一八二〇年中在位) を首領に戴きつゝ、保守的有資産階級は、その取擧げられし施政の組織を、整理し規律せんと企てたり、されど時代の傾向は、別途の方向に向ひつゝありき、蓋し商業的殖民的膨脹は、英に於て發明的新精力を鼓舞し、既に機械使用時代に踏み入りつゝあり、その他の國にても一層低き程度に之を鼓舞したればなり、而してこの心的精力潮の如く進展せんとその歩調を同じうして、個人主義的哲學は形成せらるるの過程にありき、その間この新精力に觸れ得ざりし貴族は、あらゆる禁制をもごかく想ふこととなりし、產業界指導者の掌裡に、積まれたる勢力の潮により、無援の中に一掃し去られたり、この新傾向は自由黨 Whig の政綱反對にその實際的表明を示せり、即ち同黨は米國革命に際會して、その勢力を占むるに至り、George III. の帝政的集權政策に對し、永遠的に信をおかざるに至れり、かくて非常に動的なりし一時代に於ける、教理上の自然產物たりし、自由放任的個人主義には發展の一機會授けられ、米國にては共和制的新憲政への、具體的體現を見るに至れり。

英國に於ける立憲主義、米國に於ける民主制の成功は、佛國を鼓舞し、その既に信を失へる貴族を、急激に振り棄てしむるに至れり、かくて不可能粗大なる民主的經驗への、急突進となり、又同様に迅速に奈破崙の大帝政主義への反動となりぬ、是に先だち多年の間歐洲の武斷的帝國、結局又一の武斷的世界帝國は、確立されんとするの趣ありしも、英に於ける新大工業主義により惹起されたる勢力は、その潮流を轉換せしめたり、大陸はその武斷的自國特立主義 Particularism へ逆行したるも、英國は益々その商業的膨脹を進むるの事業に當れり、商業競争にありても革事競争にありても、海上權重きをなすことは、再び著明に例證せられたり。

幾多の史家は第十八世紀の後半以來、産業革命ありとし、原動力使用の機械起れるを見て、之を史上の一大轉換期視す、此期間に進歩迅速なりしを認むる點に於ては、彼等は疑もなく正當なり、されどその特色を以て、諸社會關係の一新系統、創造されたることに歸するは、過去を了解し得たるものとすを得ず、産業革命は内容充實的發展の、非凡に強大なる一波濤たりき、それはその以前に於ける進歩の諸階段同様、好都合なる自然的心理的諸條件の刺激下に、發明及組織の才幹を、熟成せしむることにより惹起されたり、その以前に於ける前進の事例に見たると同様、內的發展は商業及放資による、外延的膨脹を鼓舞し、之がため英蘭の商業帝國は一層強大にして又組織一層整頓せる、金融帝國となれり、同革命は又科學的新知識の、普及によりて蔓延し、

從ひて他の諸國民も相次いで、産業的中心となり、外に市場及原料を搜すこととなれり、かく銀行及放資組織成熟するに從ひ、金錢の新貴族、詳言すれば商業及工場財産による新貴族にして、有爵の舊土地貴族と共に、世襲的一待遇階級に入れる者は、新生産力の富の大小に相應して起り、その結果たる資本家本位的文明は、之に先んぜる何れの文明よりも、遙かに動的にして又融通性に富む、而して又元來土地財産及契約の同一原則を、土臺とせることも、その以前の文明に比して濃厚なり。

萬民主權の學說以外に於て、輓近國民主義と古代國民主義とを、分つべき主要相は、經濟的法則の明快なる了解を、土臺とせる一政治學說にあり、實にスミスの著「諸國民の富」は、輓近自由放任政策の見地を説き出せる、古典的述作なりき、輓近の世界は富の蓄積に於ける利己の動機を、個人的活動の大發條として認む、この動機は一般市場との關係上、その作用を及ぼし、各競争者はその市場を通じ、己が勞働、生産物又は資本の代りに、需用供給關係により測らるゝが如き、正當代價を受くるものと推定せらる、かゝる財産及契約の法則の前には、萬人は理論上平等視せらる、かくて制度としての奴隸制及農奴制は、一層靜的なりし文明の、煩はしき遺物として棄てられたり、政府が民衆の支配下に、遷さるゝこと多きに從ひ、その職分は主として財産及契約の利益のため、行政權の行使を、最小程度に止むることに制限せられたり、されど又教育を社會化す

るの政策は、賢明に採用せられ、近年又産業に、人道的規律を加ふるため、幾分か行政權を擴ぐるの傾向現はれたり、此新過程たる基督教文明よりせば、特殊の評論を加ふべき所なるが如く想はるゝも、財産及契約の原則を經濟上の主力視し、その中に倫理的公理も宿さるとし、之が發展に開化の跡を尋ねんとせる、原著書にありては恰も之が評論を見ず、吾人は此點につき、聊か異論なきを得ずと雖も（本誌前卷九五〇頁本卷三七七頁參照）今姑らくその詳論を避く、唯今日尙一般に社會的管理が、諸經濟力に委ねられ、換言すれば世襲的財産權の、掌裡に握らるゝの事實は、誣ゆるを得ず。

一三

第十九世紀及初葉の第二十世紀、換言すれば奈破崙戰爭の終局より、今日に至る迄の歴史は、内包充實的成長をも、外延的成長をも示し、その間益々後者に強味を加へし歴史なり、膨脹は資本本位的銀行の貴族により指揮せられ、夫等貴族は進歩せる一切の諸國に於て、機械使用時代の諸力を著しく集中し、有力なる國民的國家をなさしめたり、而して國民主義的資本家本位主義が膨脹し得たる未開國の面積は、極めて宏大なりと共に、内包充實的發展は盡くる所なかるべきが如く想はれしより、私有財産經濟學を土臺とせる、永遠的民主制は之を續くるを得んとの、盲

目的、信仰も容易に懷抱せられたり、かくて古代地中海沿岸なる小帝國も、經驗せし膨脹及統合の諸傾向を、今や社會が世界的規模に於て、事實上繰返しつゝありしことは、殆んど想像されざりき、而して進取的なる者は、新財産の迅速増大により、大資産者に上り得べきこと、過去の史上何れの時代に於けるよりも、遙かに容易なりしより、批評眼なき人々には、機會の平等永遠的に、確立されしものゝ如く思惟されたり、されど克しその膨脹の極限は、決して達せられたりとなし待すとも、進歩の避け難き鈍化は、現に近寄れるに似たり、之れと共に階級嫉視及國民的敵視の、通常緊張も起れり、かくて世界は新たに征服の鐵蹄に踏まると想ふ間もなく、自由の崩潰に苦しむことゝなりしは、餘りに周知の一悲劇話なるにより之を繰返すの必要を見ず、一面に於ける獨裁政治の脅威、他面に於ける無政府の脅威は、一舊話の一新版に外ならず。

獨逸蹶起の怖るべき脅威により、惹起されし諸憤怒に煩はされず、諸史實を明かに洞察せんとするは多分早過ぎたりとするを得ん、されど最近の大戦争が、人性及國民的成長に照し、如何に避け難かりしかを、察取するは可能なり、獨逸は久しく強き開化的潜在精力を、養へる一國土たりしも、その精力は諸事情の特殊關聯のために、現實化せらるゝことを抑制せられたり、中古時代中商路が、陸地により伊太利に繋がれたる當時、獨逸の産業は猛烈なる一前進を始めたり、されど海外企業への出口は、尙未だ可能ならざりしを以て、有餘の精力は商路の線上を辿りて進み

つゝ勢力の中心と典型的、鬭争に當りたり、法皇帝國は實にこの鬭争を利用し、その北方の敵が國民化するを防ぎ、又之を争へる一群の諸小國として、その無力の儘續けしむるを得たり、從ひて英、佛その他沿海の諸國を鼓舞して、海上企業に當らしめし、商業革命につきては、獨逸は無準備なるを發見し、種々の新可能を捉ふることに未醒なりき、事實上宗教改革時代に、國內に於ける争亂烈しかりしことは、獨逸にとり特に死命を制し、遂に三十年戦争の怖るべき荒廢により、最低位の干潮に陥れり、分裂されたる國土はその一結果として、永年の間停滯を續け、唯その間普國の武斷的精力を圍みて徐々に結晶化したり。

奈破崙に對する獨立戦争上、普國の國民的功蹟ありて後、統合は一層迅速となり、統一のために一經濟的基礎は、關稅同盟によりておかれ、結局普國は比斯麥の指導下に、國民的一國家に於ける優位を、突如として公然打鳴らすに至れり、その後獨逸帝國は澳洪君主國との、政治上又經濟上の親善同盟により、その膨脹を始めたり、次いで經濟力及武力の盛大を期し、熟慮學問を獎勵することにより、惹起されし充實的發展の、著しき突現を見たり、獨逸人は特に發明的なる一民族に非ず、又その國は地理上大に形勝の地を、占め得たりとするを得ざるも、集中組織及特殊化により、國運の進歩を仕遂げたり。

經濟的膨脹が隣接數ヶ國を貫通し、海外帝國たる地位に、及ぼされ初むることとなりてより、

武斷的精神は強められたり、而も無障礙の膨脹、遂げられ得べき新範圍は多からず、猜忌の雰圍氣は、常に歐洲の外交を圍めるより、敵の政治的勢力により、關稅の障壁立てられ易き地方との商業、及び敵の勢力により、支配せらるゝ水面を経由すべき商業に、依頼し過ぐるは賢ならざるの狀ありき、かくて經濟的膨脹は、一層強大に陸路を逐ひて進められ、Balkansを通じ、露西亞の利害線、結局又英の利害線が、横切らるべき亞細亞に向けられたり、されど又一艦隊の完成も計畫せられ、その目的とする所は明かに、英の海上權を凌駕するにありき、是等の侵襲的政策は、事實上、戰爭の一宣言たりき、蓋し海上權が陸上權に加へられたりとせんか、獨逸は世界を自由に指揮し得べきことゝなるべきを以てなり、かゝる政策は自然に、敵對の準備を烈しからしめたり、商業的膨脹の希望に驅られては、實業の興隆につれて形成されし、割合に民主的なる分子にござりてさへ、軍人階級の優越は、避け難きものゝ如く想はるゝに至れり、その他尙軍國主義を強むるの、一因子となるものに、産業界の民衆間に於ける、社會主義の普及ありき、即ち之がために實業家界の人を驅りて、戰爭貴族と提携せしむるに至り、英國型の民主制を以て、無何有卿の如く想ひ探らしむるに、預りて力ありき。

富と勢力とは増せるより、統御すべき世界的一地位に、進むの一路を強ひて探らんとするの誘惑は、一層強大となれり、かゝる一地位に伴ふ素晴らしき褒賞は、餘りに誘惑的なりき、特に經

濟的、世界統合に向ひて進むべき、諸力増大せるを以て然りとす、かくて世界の覇權を握るか、將た没落かを決するの一戰役は、着手せられたり、然るに第二の途によれる決着は、世界のため又結局は多分獨逸のため幸ひにも、運命の投賽によりて生み出されたり、而して海上權と間接に人民衆經濟生活を擊破すべき、その増大能力とは、決定的因子たるを再び實證せり、聯合軍聯合の海軍々備に照し、又獨逸を敵として、確かに一列並びとなさるべき、人々及物資の大卓越に照さんか、獨逸が世界秩序攻撃に當れるは、明かに軍國的傳習に誘はれ、又謂れなき國民的私慾主義により焚き付けられたる、一指導者仲間の行動たりき。(未完)